

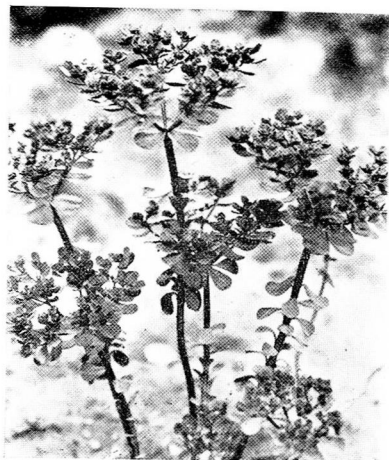
有毒植物(6)

北大薬学部教授 三橋 博

トウダイグサ (トウダイグサ科)

各地の路傍などに生ずる越年草で細長い円柱形の茎は直立し25-30 cm位、切ると乳白色の汁がしみ出る。葉は柄がなく、互生、茎頂には5葉輪生する。形はへら形か倒卵形である。春に花を開くが一見1個の花の様に見える花序を着ける。小総包は黄緑でゆがして壺状になり、この総包の中に雌花1個と雄花数個を生ずる。全草に刺激性の成分を含み有毒である。トウダイグサは今の燈台ではなく昔、室内で用いた燈架に形が似ていることによる。本道にも多くみられるナツトウダイ、ペニタイゲキ、ノウルシ、及び外来植物で庭園に植えられているホルトソウ(ホルトガルの草の意)は同様に有毒である。但し漢方ではこれらを利用薬として用いる。

トウダイグサ科には有用な植物も多く、トウゴマ(ヒマ)はヒマン油の原料として種子を用いる。ヒマン油は下剤として重要であり又工業上潤滑油として、ポマード、印肉にも欠くことの出来ないものであるがこの中には有毒成分(リチン、リチニン)が含まれ家畜、特に馬に作用が強い。



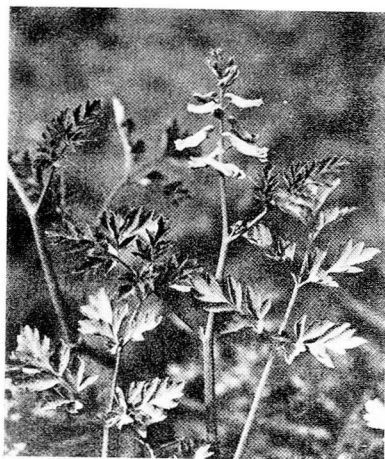
トウダイグサ

キケマン (ケシ科)

日本各地、ことに関東から西に多い越年生草本、全体白っぽい緑色で無色、軟弱でいやな臭いがある。葉は3~4回羽状分裂する。ケマンは仏殿の装飾の華鬘(けまん)に花が咲いた有様の似ているところからつけられた。全草中にプロトピンを含み有毒である。

ケシ科のこの植物に近縁で北海道特有のものとして、エゾエンゴサクがあるが春濃青紫色の花を開き、鎮痙、鎮痛作用を有する。高山の女王ともよばれるコマクサも同様の成分(ジセントリン、プロトピン)を含み鎮痛作用を有する。

北米原産で観賞用に多く栽培されるハナビソウは、夏に黄色の大きな花をひらく。全草にサンギナリン等の成分を含み有毒である。観賞用に栽培されるヒナゲシに近縁のケン、オニゲシ等は阿片の採取に用いられるので法律で栽培が禁止されている。



キケマン

ヒヨドリジョウゴ (ナス科)

低い山や野原に普通にみられるつる状の多年草である。全草に軟かい毛が密生している。葉は互生して柄があり、下部のものは2~3片に深くさげ、上部のものは長楕円形である。夏から秋にかけて、葉と対生して花枝をつけふたまたまに枝わかれしてまばらに白い花を開く。果実は球形で直径約8 mm、熟すと紅色となる。ヒヨドリが好んで食べるので和名はつけられた。果実(多分全草)にソラニンなる成分が含まれ有毒である。近縁のイヌホオズキも山野に普通にみられる有毒植物である。夏から秋にかけ節間の途中から長さ1~3 cmの花枝をだし、数個の白花をつけ、液質の果実は熟すると黒色になる。民間薬として果実、葉を内用すれば鎮痛、催眠効果ありとしている。



ヒヨドリジョウゴ